「コーカソイド」概念の誕生

―ドイツ啓蒙期におけるブルーメンバッハの「人種」とジェンダー

弓削尚子

はじめに

現在なお北米を中心に用いられている「コーカソイド」（コケイジャン／コーカサス人種）という語は[1]、一八世紀末のドイツに生まれた。ドイツ後期啓蒙主義の中枢を担うゲッティンゲン大学の医学部教授で、「形質人類学の祖」とされるヨハン・フリードリヒ・ブルーメンバッハ（一七五二-一八四〇）が一連の「人種」に関する著作で学術用語としてこの分類概念を確立した。しかしブルーメンバッハの研究は、彼を師と仰いだフランスの高名な動物学者ジョルジュ・キュヴィエ（一七六九-一八三二）やアメリカの人類学者サミュエル・G・モートン（一七九九-一八五一）をはじめとして、その後それぞれ独自の読解が重ねられ、西洋諸国の人種学の勃興とともに「コーカサス人種」概念は独り歩きを始めた。

「コーカサス」という命名は、聖書のノアの箱舟伝説で、大洪水の後に箱舟が漂着したとされるアララト山が小カフカース（コーカサス）山脈に位置していることに由来する[2]。しかし、ブルーメンバッハによる「コーカサス」の命名には、宗教的モチーフ以上に重要な根拠があった。頭蓋骨の形状形態と旅行者の実見記録に基づいたコーカサス地域の人々に対する美的評価である。これに従って定義された「コーカサス人種」は、今日のイメージと必ずしも一致せず、「金髪

碧眼のヨーロッパ的風貌」に絶対的価値がおかれたわけではなかった。ブルーメンバッハは著作の中で、「コーカサス人種」の肖像を掲載しているが、そこに描かれているのは、ターバンを巻いたトルコ人男性であった。

アメリカの科学史家スティーヴン・J・グールドは、名著『人間の測りまちがい』の中で、「なぜ西洋で最も一般的な人種がロシアの山脈の名前になぞらえたのか」と問い、「現代の人類分類の基礎をつくった人物」としてブルーメンバッハに着目し、その回答を求めている。[3] 一九世紀のダーウィンと比肩してブルーメンバッハを評価するグールドは、西洋白人（男性）中産階級の優位を前提とする近代科学勃興期の偏向を指摘している点で注目に価する。しかし、そもそも「コーカサス山脈」といっても広大な山岳地域を指し、ひと口に「ロシアの山脈」と言い切れるものではない。この地域は古来より、統治勢力においても宗教的、民族的にも複雑多様で、ヨーロッパとアジアの揺らぐ境界に位置する「文明の十字路」と形容されている。[4] たとえば、一八世紀のドイツで最大規模を誇る『ツェドラー大事典』には、この山脈は「アジアの山脈」と記されている。[5] ブルーメンバッハが生きた時代には、エカチェリーナ二世の積極的なコーカサス政策により、ロシア帝国の支配が及び、この地域の「ヨーロッパ化」が進むものの、オスマン帝国とイランの勢力が厳然と立ちはだかっていた。

いうまでもなく「人種」概念は、アプリオリなものではなく、社会的、文化的に構築され、その意味内容は変化を繰り返してきた。近現代社会における国民統合や植民地支配に関して、「人種」概念に着目する研究がさかんであるのは、そのためである。[6] しかし、「人種」概念の虚構性を指摘し、その「科学的」根拠に疑念を呈する立場からも、ブルーメンバッハの「人種」論が十分検証されてきたとは言い難い。ブルーメンバッハが「コーカサス人種」の表象としてイスラーム世界を選んだという事実は看過されてきた。ブルーメンバッハのこの選択は、中世以来のキリスト教徒か異教徒かという宗教的二分法を乗り越えるものであり、これは、啓蒙期における「人間を対象とする博物学」がキリスト教的価値観からの脱却を伴っていることを示している。と同時に、彼の「人種」論は、啓蒙期に生み出された人権思想・平等思想と

真っ向から対立することになる「近代科学」としての人種学の起点になっている。啓蒙期の博物学から近代の人種学へと移行する歴史的文脈の中に、ブルーメンバッハを呼び戻す必要があるだろう。

ブルーメンバッハの「人種」論には、グールドだけでなく、米国の研究者が大きな関心を寄せてきた。[7] 本稿に直接、示唆を与えるものとしては、ロンダ・シービンガーとサラ・エイゲンの研究がある。科学史家シービンガーは、ブルーメンバッハの分類をジェンダーの視点から捉え、「女性美の観念が科学を支配した異常な事例」と裁断する。[8] ブルーメンバッハが強調する「コーカサス人種」の美しさが、女性美と密接に関わっていたためである。彼は、それを証明するための決定的な標本として、彼曰く、「絵に描いたような美しい」女性の頭蓋骨を例示した。頭蓋骨の女性美にこだわるのは奇妙にも感じられるが、ブルーメンバッハの関心は、解剖学的に性差を追究しようとする啓蒙期の医学研究の流れにあるものであった。

『ドイツ人による人種の発明』の編著書があるゲルマニストのエイゲンは、ブルーメンバッハの分類の真意を読み取ることに努め、後世の受容におけるブルーメンバッハの「人種」論との差異を強調する。「人種の発明をブルーメンバッハに帰すことが一九世紀、二〇世紀の科学史のスタンダードであった」が、それにもかかわらず（それだからこそ）、誤解を伴う単純化が横行していたと指摘する。彼女はブルーメンバッハの図像資料に注目し、その表象分析により、彼がこれらの図像を目にする読者に何を求めたのかを明らかにし、現代の「人種」認識の議論へとつなげていく。[9]

ドイツにおいては、ナチズムの人種政策の前史となる反ユダヤ主義の歴史研究が蓄積されるかたわら、「人種」概念そのものが戦後社会の中でタブー視され、ブルーメンバッハの名前が歴史学において登場することは稀であった。[10] もともと啓蒙主義研究は、「学者の共和国」に象徴されるとおり、一国史にこだわるのでなく、ヨーロッパ全体を俯瞰することが前提とされていた。それが、一九九〇年代に入ってポスト・コロニアリズムの大きなうねりを受け、「啓蒙のヨーロッパ」研究も、ヨーロッパの外の世界へと地平を広げていった。一八世紀ドイツと非ヨーロッパ世界との接点に関心が向け

られ[11]、世界の「人種」を対象としたブルーメンバッハの著作も射程に入るようになった。とはいえ、ブルーメンバッハ研究は、ドイツに拠点をおいて活躍したカナダ人のフランク・W・P・ドゥゲルティの仕事に負うところが大きく[12]、最近はノルベルト・クラットのような研究者もいるが[13]、ドイツの歴史学界における啓蒙期の「人種」への関心は、全体として英語圏ほど高くはない。「人種」概念の誕生ではなく、啓蒙期における「人間の学問」という枠組みを好むといってよいのかもしれない[14]。

以下、本稿を進めるにあたって、まず、啓蒙知識人としてのブルーメンバッハ像をとらえ、彼が創設した「人種」論の基礎となる五分類について押さえておきたい。その上で、彼がいかにして「コーカサス人種」概念を生み出したのかを考察する。ブルーメンバッハにとって、そして「コーカサス人種」概念の発明にとって、グルジア人女性の「最も美しい頭蓋骨」との出会いは決定的な出来事であった。

最後に、これまで等閑視されてきた「コーカサス人種」の図像資料を取り上げ、イスラーム世界の表象に含意されたブルーメンバッハの意図を読み取りたい。そこには、異教徒に対する寛容の精神や、非ヨーロッパ世界に対する「知への欲望」が確認されるばかりでなく、啓蒙期の「科学」に内包されるジェンダー問題も潜んでいた。

啓蒙主義という歴史的文脈の中で、「人種」の起源についての物語の再生を試みること、これが本稿の目的である。

1. ブルーメンバッハと五つの「人種」

(1) ゲッティンゲンと世界を結ぶ知的ミリュー

ブルーメンバッハは、一七五二年、ドイツ中部の町ゴータに生まれた。同世代には、ドイツを代表する文豪ゲーテ（一七四九–一八三二）がいる。彼は、自然科学に造詣が深く、動物と人間を分かつとされた顎間骨を発見している[15]。ブルー

メンバッハのライバルで、ゲッティンゲン大学の哲学部教授のクリストフ・マイナース（一七四七-一八一〇）は、人種理論を歴史哲学の中で展開させた[16]。一つ上の世代には、哲学者カント（一七二四-一八〇四）がおり、大学で人間学や自然地理学の中で「人種」を講じた。

ブルーメンバッハの父親ハインリヒはギムナジウムの教師（教授）で、『ツェドラー大事典』にも記載されている著名人であった[17]。息子のヨハンは、父の膨大な蔵書の中からディドロやヴォルテールなどのフランス啓蒙思想家の作品に親しみ、リンネ、ビュフォン、ハラー、ベイコン、カント、スピノザの著作に刺激を受けた。父からはとくに博物学Naturgeschichte[18]の醍醐味を学んだと述懐している。イェーナ大学で博物学と考古学を学んだ後、医学を修めるためにゲッティンゲン大学へ移った。

この大学は、現在も医学研究に優れ、この分野のノーベル賞受賞者を輩出しているが、その伝統は開学当初にさかのぼる。一七三六年の設立時、ゲッティンゲン大学は、解剖学者として著名なスイスのアルブレヒト・フォン・ハラー（一七〇八-一七七七）をベルンから招聘し、解剖学や外科学といった「近代医学」の充実をはかった。一七七二年からこの大学で学んだブルーメンバッハは、ヨーロッパ最先端の医学部に籍をおき、一七七五年、学位論文「人類の自然な多様性について」を完成させた。若きブルーメンバッハの博士論文執筆には、彼が師事していたクリスチャン・W・ビュトナー（一七一六-一八〇一）の存在が大きかった。膨大な量の旅行記と図像資料を駆使して進められたビュトナーの博物学講義はブルーメンバッハを魅了した。リンネの『自然の体系』第一二版を手にし、とくに哺乳類についてビュトナーに学んだ。

「彼は、……多くの旅行記と外国の民族の図像を膨大な蔵書から取り出して例証した。こうして私は、『人類の自然な多様性について』という博士論文を書くことになり、この興味深いテーマにますますとりつかれた。私の人類学コレクションはまもなく充実し、いたるところで知られるようになった[19]。」

学位取得後、ブルーメンバッハはすぐに博物学の講義を担当し、三年後、二〇代半ばにして医学部の正規教授となる。それから約四〇年間、ゲッティンゲン大学で教鞭をとり、形質人類学の基礎を築くとともに、比較解剖学や動物学においても功績を残し一八四〇年、この大学都市で没した。彼の墓は、現在、市民憩いの公園となっているアルバーニ墓地にあり、この地の天文台長を務めた数学者ガウス（一七七七-一八五五）や、医学部の同僚で著名な産婦人科学者であるベンヤミン・オジアンダー（一七五九-一八二二）らとともに眠っている。

大学都市ゲッティンゲンはハノーファー選帝侯領に属し、英国ハノーヴァー朝との同君連合下にあったため、ブルーメンバッハの研究はイギリスとの関係が深かった。彼のように、ヨーロッパから一歩も踏み出したことのない、いわゆる「書斎の博物学者」にとって、国家事業としてクックの学術探検旅行を企画・支援するイギリスは頼もしい後ろ盾であった。クックの世界周航の収集物の多くは、ゲッティンゲン大学に付属する王立学術博物館に寄贈され、ブルーメンバッハはその管理を任された。クックの旅行に同乗した探検家にして博物学者、さらに英国王立協会会長の座にあったジョゼフ・バンクス卿（一七四三-一八二〇）との親交も厚く、[20] ブルーメンバッハは、代表作『人類の自然な多様性について』の第三版をバンクスに捧げている。

ブルーメンバッハは、やがて英国王室の宮廷顧問官の地位も得る。こうした社会的名誉は、彼の学術的業績の評価を高め、彼の「人種」論が広く受容される地盤を形成していくことになった。私生活では、ハノーファー選帝侯領の名士であるエルンスト・ブランデス（一七五八-一八一〇）の妹ルイーゼを妻に娶り、四人の子どもに恵まれた。この結婚によって、大学における先輩格の同僚で、著名な古典学者であるクリスチャン・ゴットリープ・ハイネ（一七二九-一八一二）とは、妻同士が姉妹であるため、姻戚関係となった。さらに、ハイネの娘テレーゼが結婚したゲオルク・フォルスター（一七五四-一七九四）は、クックの旅に同乗して『世界周航記』を著しており、当時ドイツ人として最も広い世界を見たといわれるこの「旅する博物学者」ともブルーメンバッハは浅からぬ関係にあった。ブルーメンバッハが、イギリスと密

接な関係にある最も近代的なゲッティンゲン大学で活躍したこと、ここを起点に国際的な知的ネットワークを築いたこと、私生活も「きちんとしている」教養市民男性の模範的存在であったこと、これらの要素が重なり合って彼の研究成果は受容されていった。

ブルーメンバッハの教えを請おうと各国からゲッティンゲンに学生が集まってきたように、彼の人的ネットワークはイギリスに限るものではなかった。彼の頭蓋骨コレクションのリストには、カリブ人女性の頭蓋骨を贈ったバンクス卿のほか、オランダ人、イタリア人、デンマーク人の名前が提供者として挙がっており、ブルーメンバッハは各国の博物学者と書簡を交え、学術情報を手に入れていた。ナポレオン戦争によってゲッティンゲンがフランスに占領され、大学が閉鎖に追い込まれそうになったとき、フランスの博物学者ジョルジュ・キュヴィエは、ブルーメンバッハの国際的名声をナポレオンに示して、大学の存続に尽力したといわれている。[21] このような名声を博すことになったブルーメンバッハの学術的功績とはいかなるものか。「コーカサス人種」概念を生み出した彼の五人種説を次に考えていきたい。

(2) 五つの「人種」

一七七五年、ブルーメンバッハは博士論文『人類の自然な多様性について』(以下、『人類の多様性』と略)を提出し、翌年、出版した。[22] そこでは、一八世紀最大の分類学者カール・フォン・リンネによるホモ・サピエンスの分類にならって、人類を四つのカテゴリーに分けている。すなわち、「西アジア人と北アフリカ人を含むヨーロッパ人とラップ人、エスキモー人」、「東アジア人と南アジア人」、「北アフリカ人を除くアフリカ人」、「エスキモーを除くアメリカ人」である。四大陸を中心にしたもので、格別な分類ではない。その後、『博物学ハンドブック』(一七七九/八〇)で、クックの世界周航がもたらした最新情報を取り入れ、オーストラリアとポリネシアの人びとを独立したカテゴリーに収めた五分類へと変更する。[23] 一七八一年には、『人類の多様性』の第二版を出し、この書でも初版の四分類から五分類へと変更し、バンク

ス卿に捧げた第三版（一七九五）で、はじめてこの五分類に学術名をつけた。「コーカサス変種 varietatis Caucasiae」、「モンゴル変種 varietatis Mongolicae」、「エチオピア変種 varietatis Aethiopicae」、「アメリカ変種 varietatis Americanae」、「マレー変種 varietatis Malaicae」である。[24] 初版から二〇年の歳月を経て、世界の諸民族に関する情報量は格段と増え、初版の三倍以上の分量になった第三版において、「コーカサス人種」概念がはじめて打ち出され、ここにブルーメンバッハの五人種説が完成した。[25]

ラテン語で書かれた『人類の多様性』は、一七九八年にドイツ語訳が出版され、読者層が広がる。ブルーメンバッハは、このドイツ語版をヨーハン・ゴットリープ・フォン・ヘルダー（一七四四-一八〇三）に捧げた。歴史哲学の観点から「人類史 Geschichte der Menschheit」の叙述に挑んだヘルダーを、ブルーメンバッハは敬慕していた。[26]『人類の多様性』第三版は、さらに一八〇一年にオランダ語、一八〇四年にフランス語に翻訳され、一九世紀を通じてそれぞれ版を重ねた。英語への翻訳は、ロンドンの人類学協会により、ブルーメンバッハの没後二五年を記念して一八六五年に出されている。これには、『博物学研究』（3．（1）参照）の翻訳と、ドイツ人とフランス人の人類学者による回想録も収められている。『ブルーメンバッハ人類学論文集』と題されたこの英語版は、その後、二〇世紀のアメリカで、ちょうど公民権運動が全盛である一九六〇年代末からニューヨークやボストンの出版社で版を重ねる。[27] 現在もなお米国の「人種」をめぐる歴史的考察に、人種学の祖としてブルーメンバッハの名前は健在である。

このように西洋諸国に広く伝播したブルーメンバッハの五人種説だが、五つの「人種」はそれぞれ並置されていたわけではない。この点にブルーメンバッハの説が受け入れられた要因があると考えることができる。

「コーカサス変種を私は第一の位置においた。なぜなら後に挙げる理由により、起源となる人種とみなさなければならないからである。この変種から最もかけ離れ、最も異なった両極をなすのは、モンゴル変種とエチオピア変種である。他の二つの変種は、本来の変種であるコーカサスと両極の中間に位置する。すなわち、アメリカ変種はコーカサスとモンゴ

ルの間に、マレー変種はコーカサスとエチオピアの間にある。[28]」

ラテン語の「起源となる人種 primigenia」は、ドイツ語で die ursprüngliche Race と訳されており、このくだりには、「人種 Race」という外来語と「変種 varietas/Varietät」が混在している。すなわち「変種」と「人種」はほぼ同義とみなしてよいであろう。[29] 五つの「人種」を図式化すると、三角形の頂点に「コーカサス」、底辺の両端に「モンゴル」と「エチオピア」、それぞれの辺の中間に「アメリカ」と「マレー」が入る。世界の多様な人類の中で、「本来の人種」にして「第一の人種」、これが「コーカサス人種」に与えられた地位であった。

その容貌は次のような具合である。

「色は白く、頬は赤色で、髪は褐色か栗色、頭は球形。顔は均等な卵型で各部位は適度にはっきりとした輪郭をなし、額はたいら、鼻梁は狭く、わずかに鉤型で、口は小さい。上下の顎に前歯はそれぞれ垂直。唇はやや前に出ており、（特に下唇は）適度に開いており、下顎はふっくらして丸い。[30]」

ブルーメンバッハのいう「コーカサス人種」は金髪でも碧眼でもない。ただ、「白い肌」であることは、「第一の人種」の特徴としては重要であった。肌の色素の「退化」の現象と関係していると考えられたからである。

「……この種（部族）は、われわれが人類の本来の、本物の色とみなすことのできる白色をしている。上述したように、この色から黒色へと退化するのはたやすく、それに対して、黒から白に変わるのはずっと困難だからである（すなわち、この石炭色素の分泌と沈殿が時間とともに進むからである）。[31]」

当時、皮膚の色の遺伝的区分については議論がさかんで、この遺伝性をもって「人種」という概念が定着していったともいえる。たとえばカントは、「人種」を「人類のクラス分類上の差異のうちで不可避的に遺伝する」ものととらえている。その根拠として、「熱帯地方に住むヨーロッパ人は多くの世代を重ねてもニグロにはならず、彼らのヨーロッパ人としての容姿と色を保持する」ことを挙げている。[32] もっとも、カントには「ニグロ」は「陰茎と臍の周囲」を除いて、生

まれたときは白く、「肌の黒さは生後一ヵ月でこれらの部分から全身に広がる」など[33]、ファンタジックな記述もみられる。カントが「ブルネットの白人種」を「本来の人種」としている点には、ブルーメンバッハも言及しているが[34]、肌の色のみで五つの「人種」の位置関係が決まるのではない。ブルーメンバッハの描写では、「モンゴル」は黄褐色、「エチオピア」は黒色、「アメリカ」は銅色、「マレー」は黒褐色であり、単純な白黒の濃淡スケールで測っていない。

先の「コーカサス人種」についてのブルーメンバッハの記述は次のように続く。

「[コーカサスは]一般的に、私たちの調和美という考えにしたがうと魅力的で美しい顔立ちと思われる。」

古代ギリシアの美意識が重きをおいた身体美ではなく、顔立ちの美しさに限定されている。それは、ブルーメンバッハによる分類の根拠が頭蓋骨の形状にあったためである。

頭蓋骨の計測分析は、当時、オランダの解剖学者ペテルス・カンペル（一七二二-一七八九）が打ち出した顔面角の研究が知られていた。顎の先端部から額の最も突き出た点を結び、耳道の開口部から鼻腔の底までに引いた線とでできた角度である。これにより、猿、オランウータンから、黒人、カルムイク人、ヨーロッパ人、古代ローマ人、古代ギリシア人まで数値化された位階が示された。ブルーメンバッハはカンペルの著作に目を通し、一七七九年秋にカンペルがゲッティンゲンを訪れた時も彼の講演を聞いている。しかし、カンペルの顔面角に納得することはできなかった。

「[カンペルの顔面角を採用するのではなく、]……頭蓋骨を下顎ではなく、頬骨を用いて、[各人種の]頭蓋骨を水平に机の上に並べ、上から考察することによって、後頭部の民族的特徴のすべてが際立つ。顎や頬骨がどちらを向いていようと、頭蓋が広かろうと狭かろうと、額が平たかろうと隆起していようと、一瞬ではっきりと見ることができる。これを思い切って、頭頂規準（norma verticalis, Scheitelnorm）と呼ぶことができよう。この規準に基づいて比較したのが第一の図で、三つの頭蓋骨をスケッチした。ほとんどがシンメトリーで美しさを備えているのは中央の頭蓋骨（Fig. 2）で、あるグルジア人女性のものである。両サイドにある頭蓋骨は、これとはまったく相違している。その一つ（Fig. 3［図像左］）

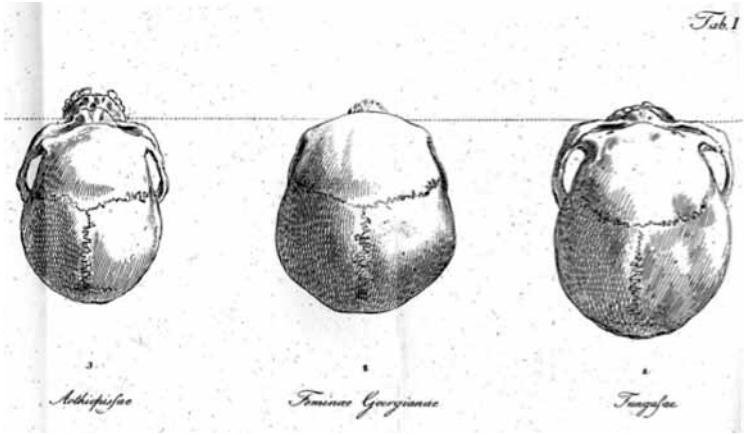

図 1
Aus：Johann Friedrich Blumenbach, *De generis humani varietate nativa*, editio tertia, Göttingen 1795, Tab.1.

は、前方が長く同時にくちばしのような形になっているが、これはギニア出身の黒人女性のものである。別のもの（Fig.1［図像右］）は、横に引っ張られ、同時に平たく潰されているが、これは騎馬民族のツングース男性のものである。[35]」（図1参照）

「ギニア出身の黒人女性」は「エチオピア人種」、「騎馬民族のツングース男性」は「モンゴル人種」に属し、「コーカサス人種」を頂点とする三角形の底辺の両端に位置する。

頭蓋骨を上から垂直方向に観察するだけのブルーメンバッハの規準はわかりやすい。しかし、カンペルの顔面角のように数値化されないため、「客観性」という衣をまとうことはなく―数字のマジックに頼ることなく―、その規準は観察する者の主観に委ねられる。人類学者ブルーメンバッハの美的規準はいささか牽強付会である。「われわれの調和美という考え」にしたがって、読者とも共有できるものであるとされている。肌の色だけでなく、頭蓋骨の「美しさ」が、ブルーメンバッハの五人種説の根拠であった。

ブルーメンバッハは、ドイツ人やローマ人などの頭蓋骨も所有していたが、「コーカサス人種」の例証にこれらを選ぶことはなかった。なぜブルーメンバッハは足を踏み入れたこともないグル

ジアの地を選んだのか。そしてなぜそれは、図1の中央にFeminae Georginaeと示されているように女性の頭蓋骨であることが強調されたのか。「コーカサス人種」概念の誕生には、「グルジア人女性の美しさ」が鍵となっていた。

2.「コーカサス人種」概念の誕生

(1) グルジアとの出会い

四世紀にキリスト教化されたグルジア地方は、一五世紀以降、オスマン帝国とイランのサファビー朝により分割統治され、とくに西グルジアはイスラーム化、トルコ化が進んでいた。「書斎の博物学者」ブルーメンバッハがそのような地に出会ったのは、むろん書物においてであった。啓蒙の時代には、学術旅行が盛んに行われ、世界各地の情報が爆発的に増加した。それはイスラーム世界に関しても例外ではなかった[36]。イギリスでイスラームの歴史が編まれ、コーランの英訳が行われるなど、東洋学の萌芽がみられた。ドイツにおいては、ブルーメンバッハの先輩格の同僚であるヨハン・D・ミヒャエリス（一七一七-一七九一）が、聖書文献学の関心から中近東への学術旅行を企画し、旅行家カーステン・ニーブールに詳細な調査を託すなど、ゲッティンゲン大学が東洋学を牽引していた[37]。ニーブールによるアラブ旅行記は一七七〇年代に次々と出され、学位論文を執筆していた若きブルーメンバッハの読書リストにも挙がったことであろう。ブルーメンバッハも一七七〇年代に、イギリス人によるインドとペルシアの旅行記を翻訳している[38]。

他方、東洋学からのアプローチではなく、一八世紀後半以降、ますますコーカサス地域の覇権を強くしたロシアの側からコーカサス地域をとらえた旅行記がドイツ人によって発表されている。スウェーデンのリンネのもとで学んだヨハン・G・ゲオルギー（一七二九-一八〇二）は、一七七〇年、サンクト・ペテルブルクでロシアの調査旅行に参加し、「ロシア帝国のあらゆる民族について」ドイツ語で発表した[39]。「ドイツ人探検家」による最新の情報という点からいえば、ゲオル

ギーの旅行記は貴重であり、マイナースなどは『人類史概説』において幾度となく引用している。しかし、ブルーメンバッハの「コーカサス人種」に決定的な影響をもたらしたのは、百年近く前のフランス人旅行家ジャン・シャルダン（一六四三–一七一三）の著作であった。

ブルーメンバッハが「旅するフィロゾーフ」と呼んだシャルダンは、一六六〇年代半ばから一六八〇年代の間に二度オリエントを訪れ、トータルで一四年ほど滞在した経験をもとに『ペルシア紀行』を発表した。[40] モンテスキューがこの文献を用いて『ペルシア人の手紙』を著し、ペルシア人の目からヨーロッパの宮廷を批判的に描いたことは知られている。ヴォルテールが「旅行者の中でこれほど面白い手記を残したものはいない」と述べ、ルソーが「宝石商シャルダンはプラトンのように旅行し、ペルシアについてすべてを語り尽くし、言うべきことをまったく残さなかった」と賛嘆するなど、一八世紀後半においても依然としてシャルダンの旅行記の価値は高かった。

ブルーメンバッハがはじめて「コーカサス人種」概念を打ち出した『人類の多様性』第三版には、次のように命名の理由が示されている。

「この人種の名前を、私はコーカサス山脈からとった。隣接する国々、とくに山脈の南方地帯には最も美しい民族、すなわちグルジア人が住んでいるからだ。[41]」

この箇所にシャルダンの旅行記が註に挙げられ、以下の長い文章が引用されている。

「グルジアの血はオリエントでいちばん美形の血筋である。世界でいちばんの、と言ってもよい。〔…中略…〕自然がこの国の大部分の女性に、他では見られない優雅な風情を与えている。グルジア女を見て惚れないことは不可能だと思う。グルジア女のものほど魅力的な顔を思い描くこと、美しい体つきを思い描くことはできない相談だ。[42]」

E・サイードの『オリエンタリズム』をもちだすまでもなく、[43] 西洋男性の「科学的なまなざし」に東洋女性へのエロティックなまなざしが内包される典型的な叙述である。

「コーカサス人種」の女性の美しさに注目したのは、ブルーメンバッハだけではない。マイナースは『人類史概説』の中で、シャルダンやゲオルギーらの旅行記をもとに、「コーカサス諸民族、とくにその女性たちは地上で最も美しい」と述べ、これらの民族は「立派な体格、美しい顔立ちや目鼻立ち……」によって「モンゴル諸民族と区別される」と明言している。[44]

ゲッティンゲンだけでなく、ケーニヒスブルクの大学でも、グルジア人女性の美しさは話題となった。カントは「自然地理学」の講義において、「アジアのトルコ」の中で「ミングレリア、グルジア、およびイメレティアは美女の苗畑である」と述べた。[45]他にも、「モンゴルの北部、カシミール、グルジア、ミングレリア、チェルケス、さらにアメリカ＝イギリスの植民地に接する地域にいたるまで、金髪で容姿端麗な碧眼の人びとが見られる」[46]とした。グルジア、ミングレリア、チェルケスは、コーカサス地方に位置する。ちなみに、「旅する博物学者」ゲオルギーは、旅行記の中で「その美しさと快活さ、道徳と趣味の洗練さにより有名」であるチェルケス人の女性たちに注目し、「コーカサスでは、女性たちの赤い髪が美しいとされるため、ポマードで赤く染めている」と述べている。[47]「書斎の博物学者」であるカントが好む金髪は、かの地では「流行」ではないようだ。いずれにせよ、「グルジア人の血統は東洋で、いやおそらく世界中で最高である。……自然は、他では出会うことのない魅力をそこの女性たちに惜しまず与える」というシャルダンの記述はそれだけ（男性）博物学者たちの関心を呼んだのであろう。

よく指摘されるように、人類の区分概念として「コーカサス人種」を用いたのはマイナースの方が早い。一七八五年に出版した『人類史概説』の中で、彼は聖書の創世記における洪水後の人類の救済に関する「東洋学者たちの意見」を参考に、人類の起源が「コーカサスとその南部に続く平野にある」点を踏まえ、「コーカサス主幹民族 Volker=Stamm」を設定し、その対極に「モンゴル主幹民族」を位置づけ人類を二分した。[48]ブルーメンバッハ自身が著書で述べているように、当時は多くの博物学者たちが人類の区分について提案しており、人類の起源がコーカサス地域にあるという神話も広く信じ

られていた。人類の起源の地に暮らす住民が「美しい」ということも、シャルダンを読む博物学者たちは注意を払っていた。ではなぜブルーメンバッハの発明による「コーカサス人種」の概念が後の世に流布したのだろうか。

(2)「最も美しい頭蓋骨」

一七世紀末のフランソワ・ベルニエに始まり、リンネ、カント、ビュフォン、マイナースら人間の分類を試みた先達とブルーメンバッハとが決定的に異なるのは、彼が文献からの情報に依拠するばかりでなく、数多くの標本を収集し、そこから「人種」の知を構築したことであった[49]。彼の「誇るべき人類学コレクション」には、多様な民族の毛髪や奇形胎児、解剖標本があったが、何よりもその中心は頭蓋骨であった。彼は、ゲッティンゲンにいながらにして、旅行者や探検家、外交関係者との人脈を生かし、世界各地から頭蓋骨を集めた。それはさながら、スウェーデンの都市ウプサラに座して、世界中の植物の標本や種子を入手したリンネを彷彿とさせるものであった[50]。博物学者の巨星リンネは人間も分類の対象から免れないとして、『自然の体系』で人類を四つの「属」に分類したが、ブルーメンバッハほど人類の標本収集には熱心ではなかった。

ブルーメンバッハは頭蓋骨の地域、性別、寄贈者名を付してコレクションを整理し、そのリストを『人類の多様性』第三版の冒頭に掲載した[51]。その数は八二個だが、当時のコレクションとしては破格の多さであった。顔面角を測定したオランダの解剖学者、カンペルの手元にはこれほどのものはなかった。とはいえ、たった八〇あまりの標本で、二〇世紀まで影響を持ち続けた五人種説が成立したのであった[52]。

そのリストを概観すると、ブルーメンバッハが「コーカサス人種」に分類した頭蓋骨には、ドイツ人の男女やオランダ人、フランス人、イタリア人など多くのヨーロッパ人のものがあり、またコーカサスに属するとして、ユダヤ人の少女、ユダヤ人の青年、ユダヤ人の老人の頭蓋骨も集めていたことがわかる。しかし、繰り返すが、彼が「コーカサス人種」の

例証にふさわしいと選んだのは、多くのヨーロッパ人が聖書によって神秘的にイメージし、旅行記によって「美しい」と確認されていながら、自分の目で確かめることはとうてい叶わない、異境のグルジア人のものであった。おそらく、ドイツ人の「美しい」頭蓋骨を選んでいたら、ブルーメンバッハはドイツにおける名声を得ることはあっても、ヨーロッパ中でその名前が知れ渡ることにはならなかったであろう。

ブルーメンバッハは、一七九三年五月、サンクト・ペテルブルクのゲオルク・トーマス・フォン・アッシュ男爵（一七二九–一八〇七）からこの頭蓋骨を入手した。突然死した女性のもので、性病にかかっていたという。アッシュは、モスクワで死体解剖に回されてきたものを当地の解剖学者から譲り受けた。彼は、「このような珍しいものを入手できた偶然にわれわれは感謝しなければなりませんね」とブルーメンバッハに宛てた手紙に記している。[53]「モンゴル人種」と「エチオピア人種」とを並べ、頭蓋骨上部から比較した図1の中央に描かれているのは、このアッシュからの贈り物である。『人類の多様性』のドイツ語版にも、一八六五年にロンドンの人類学協会によって出された『ブルーメンバッハ人類学論文集』にもこの頭蓋骨のスケッチは添えられている。

図2は、一八〇二年にブルーメンバッハ自身がスケッチしたもので、「絵に描いたようなグルジア人女性の美しい頭蓋骨」というキャプションがつけられている（図2参照）。

「[この頭蓋骨は]……グルジア人の美しさを目撃した多くの証人以外にも、旅するフィロゾーフであるシャルダンがグルジア人女性の魅惑的な美しさについて述べていることを証明するのに役立つ。[54]」

ブルーメンバッハにとって「コーカサス人種」の頭蓋骨は、単にグルジア人のものというばかりでなく、女性のものでなければならなかった。啓蒙の時代、人間の本質を掘り下げようとする知の営みは、身体的性差の探究にも熱心であった。[55]男女の差異は性器にのみ現れるのではなく、手足、毛髪、皮膚から骨格にいたるまで見出されると考えられた。ゲッティンゲンからほど近い宮廷都市カッセルでは、解剖学者ザミュエル・フォン・ゼンマリング（一七五五–一八三〇）が

図２
Aus：Frank W. P. Dougherty (Hg.), *Commercium epistolicum. J. F. Blumenbachii*, Göttingen 1984, S.149.

女性の美しい骨格図の発表を準備していた。[56] ゲーテやシラーは詩や小説の中で女性を「美しい性」として繰り返し賛美するとともに、その特徴として華奢でか弱く、感情的、依存的という女性規範を打ち出している。[57] 解剖学者たちもまた女性の特性としての美という価値観を共有していたのであった。[58] ブルーメンバッハの義兄エルンスト・ブランデスは、女性に関する著作で知られたジェンダー秩序論者の代表格であった。[59] 同僚マイナースは『人類史概説』に続いて『女性の歴史』四巻を発表し、世界の多様な民族における女性のあり方に触れながら、啓蒙の時代に到達したヨーロッパの理想的な女性像を解説した。[60]「美しい性」の「美しい頭蓋骨」。ブルーメンバッハが頭蓋骨の性別にこだわった背景には、「グルジア女」に関するシャルダンの引用に厳密であるだけでなく、このような時代的価値観をも認めることができる。[61]

ブルーメンバッハの「コーカサス人種」概念は、「人間の元来の種」の追究を、聖書に基づく神話から、頭蓋骨という標本によって、人類学や人種学という「近代科学」へとシフトさせる標石のようなものであった。ゆえにブルーメンバッハの名前は後世に残ることになったのであろう。その転機において、科学の担い手（＝人類学者ブルーメンバッハ）と対象（＝グルジア人女性の

頭蓋骨）の関係が、男性と女性というジェンダー的配置となっているのは、西洋近代科学の宿命を予感させるもので興味深い。さらにそこには、非西洋に投じられた西洋の科学的なまなざしを読み取ることもできる。というのも、ブルーメンバッハの「人種」に関する著作に発表された「コーカサス人種」をイメージした図像には、イスラーム世界が描かれているのである。

3．忘却された「人種」の表象

（1）『博物学研究』（一七九〇）の「第一の人種」

ブルーメンバッハは、読者に博物学のおもしろさを伝えようと『博物学研究』という大部の書物をまとめ、五人種のイメージ図を掲載した[62]。これらは既成の図像を借用したものでなく、彼が収集した文献資料や図像資料をもとに挿絵画家に指示をして新たに描かせたものである。その画家とは、ゲーテの小説や多くの啓蒙雑誌の挿絵を手がけたことで著名なダニエル・ニコラウス・ホドヴィエツキ（一七二六-一八〇一）である。ドイツ啓蒙期を代表するこの画家の手によって、たとえば、「第二の人種」には東屋で茶を飲む中国人の様子が、「第四の人種」には狩猟から戻るブラジル人（＝アメリカ人）の様子が、服装や家屋、背景の特徴に配慮して描かれている。五つの「人種」の挿絵には「ほとんど説明を要しない」というほど、ブルーメンバッハはこれらの出来に満足していた。では、この本の表紙口絵に掲載された「第一の人種」はどのように描かれているのか。

それは、ホドヴィエツキもブルーメンバッハも直接目にしたことのない「東洋の Morgenländisch すでに自明となっている場面[63]」を描いたものであった（図3参照）。ターバンを巻いた男性が、彼に寄り添って甘える女性と飲み物を運ぶ女性にかしずかれている。ハーレムを連想させる図像である。

図3
Aus：Johann Friedrich Blumenbach, *Beyträge der Naturgeschichte*, 1. Teil, Göttingen 1790, Titelblatt.

実際、オスマン帝国の奴隷貿易において、グルジア人女性はその美しさからハーレムに送られることがヨーロッパで知られていた。[64] シャルダンの旅行記には、グルジアの少数民族であるミングレル人の女奴隷を船の中で見かけたとして、次のように記されている。

「彼女はじつに美しい顔立ちをしていて、ほんとうに抜けるように白い肌をしていた。私は、いまだかつてこれほど美しい乳房も、これほど円やかな胸も、これほど滑らかな肌も見たことがない。この美人は欲望と同情の念を同時にかきたてたものだ。[65]」

ブルーメンバッハは、シャルダンのこのくだりを引用しているわけでもなく、ハーレムに言及しているわけでもない。『博物学研究』における「第一の人種」の定義が、ことさら東洋を強調しているのでもない。本文における説明は以下の通りである。

「第一の人種」とは、「オビ河、カスピ海、ガンジス河までのヨーロッパ人と西アジア人、それに北アフリカ人を指す。一言でいえば、古代ギリシア人とローマ人が掌握していた世界の住人とおよそ重なる。彼らは多かれ少なかれ白い肌をしており、ヨーロッパの美の概念に従うと最も良い体つきをしている。[66]」

それにもかかわらず、ブルーメンバッハは「第一の人種」の表

象にヨーロッパ＝キリスト教世界ではなく、東洋のイスラーム世界を選んだ。一七八一年にホドヴィエツキに宛てた書簡の中で、「第一の人種」の図像は「東洋的な場面にしてほしい」と請うている。[67]「できる限り、洗練された官能の快楽が感じられるもの」との文言もある。

前章で見たように、ブルーメンバッハのこのような選択には、「美しい性」というジェンダー観念があり、女性／非西洋／自然を対象とする西洋近代科学の特徴を見て取ることができる。この図像の発表後、ブルーメンバッハは念願のグルジア人女性の頭蓋骨を入手し、一七九五年に『人類の多様性』第三版で「コーカサス人種」概念を打ち出した。その翌年、『博物学対象図会』という書物で、今度は五人種をそれぞれ代表する人物の肖像を発表する。『博物学研究』の「第一の人種」には女性と東洋という二つの要素を備えていたが、『博物学対象図会』の「コーカサス人種」には女性の肖像が見られず、東洋というイメージだけが維持されている。

（2）『博物学対象図会』（一七九六）の「コーカサス人種」

一七九六年に出された『博物学対象図会』は、博物学に関連する一〇〇枚の挿絵を収めた図鑑のような書物で、[68]『人類の多様性』と並ぶブルーメンバッハの代表作である『博物学ハンドブック』を補完する図解書の役割を担っている。[69]一〇〇枚の図像のうち、人類に関するものが七枚、うち五枚が五つの「人種」を代表する人物像である。『博物学研究』の挿絵と異なり、これらのモデルは、ヨーロッパに暮らし、あるいはかつて暮したことのある実在の人物を、それぞれ画家が「完璧な模写」をしたものだという。たとえば「モンゴル人種」には、幼少時にロシアの女帝からドイツの皇妃に「贈呈」された後、美術教育を授けられてローマで画家として暮らしているカルムイク人フェオドーア・イヴァノヴィッチ Feodor Iwanowitsch が選ばれた。「マレー人種」には、一七七三年にクックの第二航海の際にタヒチからイギリスに連れてこられ、英語と西洋の作法を習得して話題を呼んだオマイが描かれた。そしてブルーメンバッハが「コーカサス人種」の

図4
Aus：Johann Friedrich Blumenbach, *Abbildungen Naturhistorischer Gegenstände,* Göttingen 1796, ohne Seitangabe (24-3).

モデルとして選んだのは、ジュズフ・アグィア・エフェンディ Jusuf Aguiah Efendi というロンドン在住のトルコ大使であった（図4参照）。

なぜグルジア人女性の肖像ではなかったのか。ブルーメンバッハは、ジュズフをモデルにした理由として、「ミルトンやラファエロでもよかったが、［ジュズフの］故郷がコーカサスに近いため選んだ」と述べている。[70] 頭蓋骨という「科学的根拠」の入手前（『博物学研究』）と異なり、入手後（『博物学対象図会』）には、女性という選択肢は念頭にない。

ブルーメンバッハはヨーロッパに滞在したグルジア人女性を知らなかっただけだと説明することもできよう。彼は自分か知人が直接知っている実在の人物を選ぶことで、肖像の信憑性を獲得する意図があった。しかし、ブルーメンバッハのモデル選択の背景には、「人種」の代表的表象を男性にするべきという時代の要請があったとする見方もある。アメリカの科学史家シービンガーは、五枚の肖像が全員男性を描いた点に着目し、「人種を形成するのは女性でなく男性」とする科学史上の前提を指摘する。[71]

ここではもう少し踏み込んで、二つの仮説を立ててみたい。まず第一に、男性の知的エリートが担う西洋近代科学は、女性／非西洋

／自然を対象とするが、対象に向けるエロティックなまなざしをオブラートに包み、エロスと対極する体裁をとる必要があった。[72]「啓蒙の世紀」には、当初、知の最先端で活躍するサロン女性や、博士号を取得する女性の物理学者や医師もいたが、一八世紀後半以降、身体的性差論が強まるにつれ、学術領域から女性は閉め出されていった。[73]矛盾するようだが、科学の担い手が排他的に男性で占められる過程で、科学の対象が女性化され、さらに科学の「中立性」を確保するために、担い手の男性から男性性は捨象されなければならなかった。ハーレムの官能的女性をあからさまに対象とすることは、一九世紀以降発展していく「科学的な」人種学には都合が悪かった。

第二に考えられるのは、頭蓋骨に付与された、新しいジェンダー的価値である。二元化された身体的性差論では、頭蓋骨は知性の宿る場として男性性と結び付けられ、女性には「産む性」として頭蓋骨よりも骨盤が着目されるようになる。[74]『博物学研究』に掲載された民族の風景と異なり、『博物学対象図会』の図像は肩から頭部までの肖像である。ブルーメンバッハがイギリスとの知的ネットワークを生かして入手した駐英トルコ大使の肖像は、「第一の人種」にふさわしい理性と威厳を備えている。[75]

ブルーメンバッハによる「コーカサス人種」の表象は、理性的な男性へと変更されたが、東洋というニュアンスは保持したままであった。なぜ彼はイスラーム世界にこだわったのか。アメリカのゲルマニスト、エイゲンによると、ブルーメンバッハはヨーロッパの読者に「文化的他者性」を意識させるようなモデルをあえて選んだという。その狙いは、「人種」概念は身体的な分類のカテゴリーとして機能するのであって、文化的道徳的優劣を決定するようなものではないことを伝えるためであった。[76]エイゲンの解釈をさらに掘り下げて啓蒙主義の文脈に照らし合わせると、次のように表現できよう。ブルーメンバッハの狙いは、それまでのキリスト教徒か異教徒かという宗教的二分化を脱構築しようというものであった、と。それは、キリスト教的価値観の相対化であるとともに、宗教的寛容の精神のあらわれでもある。「コーカサス人種」が「第一の人種」と位置付けられても、ヨーロッパ＝キリスト教徒の優位を絶対視するものではないのである。

ブルーメンバッハを敬愛していたフランスのキュヴィエは、アラブ人とヨーロッパ人を同じ「白人種」に分類した。しかし、一九世紀のフランスの植民地主義の過程において、アラブ人は徐々に「有色人種化」していったという。[77] ブルーメンバッハのイスラーム的な「コーカサス人種」の表象も、宗教的寛容という啓蒙の精神は脱色され、バイアスをかけられていく。『博物学研究』のハーレムの図像も『博物学対象図会』のターバンを巻いた男性の肖像も忘却されていった。一八六五年にロンドンで刊行され、英語圏での受容に大きな影響力をもった『ブルーメンバッハ人類学論文集』には、『博物学研究』の図像は削除され、[78]『博物学対象図会』は収められなかった。西洋列強の植民地統治や移民政策の中で、白い肌をした「第一の人種」からイスラーム教徒は閉め出されていった。

むすびにかえて

ドイツの事典をいくつか参照してみると、二〇世紀初頭には「コーカサス人種」の項目が挙がるものの、ナチズム期には「コーカサス人種」よりも「アーリア人種」の概念が多用され、戦後ドイツにおいてこの語が浮上することはほとんどなかった。[79] 他方、米国の事典には「コーカソイド」の項目が今日も掲載され、日本の中等教育においてもこれに言及する世界史教科書が用いられている。[80]「人種」概念が生物学的にはすでに破綻しているという認識は薄いようだ。

ブルーメンバッハの『人類の多様性』に戻ろう。この書では、「人類には五つの主要な人種があるが、たった一つの類しかない」と強調されている。肌の色、顔立ち、体格において、たとえ顕著な特徴を見出しえても、「すべての人種は相対的なもの」であり、その区分は「ただ恣意的においてのみ可能である」。[81] このような慎重な姿勢をブルーメンバッハがどれほど念押ししても、「人種」という発想が特定の個人や集団の差別の論理に容易に取り入れられてしまうのを阻止することはできなかった。後世からみれば、これがブルーメンバッハの、いや啓蒙主義のナイーヴさだと批判されることに

なるのであろう。と同時に、「コーカソイド」の誕生の物語が明らかになることで、月並みだが、「人種」概念の社会的構築性の威力にあらためて圧倒されるのである。

註

（1）日本語の辞書レベルでは「コーカソイド caucasoid」が用いられているので、本稿タイトルもこれを使用したが、英語では「コケイジャン caucasian」の方が一般的であるようだ。"caucasian", "caucasoid", in: *Oxford English Dictionary*, 2nd Edition 1989, online version, September 2011. ドイツ語では「コーカサス人種 kaukasische Rasse」と表現される（ただし、現在この概念はほとんど用いられていない）ので、以下、本文では「コーカサス人種」と表記する。

（2）そもそもアララト山自体、ヨーロッパ人が聖書伝説に基づいて、現在のトルコ東部にあり、イラン、アルメニアとの国境近くにある五〇〇〇メートル級の山を中世にそのように命名したものにすぎない。大洪水の後の人類の起源は別の地にあるとする聖書考古学の説もある。関谷定夫「ノアの箱舟は発見されたか?—ノアの箱舟とアララト山」『西南学院大学神学論集』四三（一九八六）一一五-一三四頁。

（3）スティーヴン・J・グールド『人間の測りまちがい—差別の科学史』鈴木善次・森脇靖子訳（河出文庫、上下巻、二〇〇八）。

（4）木村崇ほか編『カフカース—二つの文明が交差する境界』（彩流社、二〇〇六）。一八世紀については、同書に収められた以下の論文を参照。黛秋津「帝国のフロンティアとしてのカフカース—一八世紀の帝政ロシアのカフカース進出とオスマン帝国」一七-五六頁。

（5）„Caucasius, ein Gebürge", in: *Johann Heinrich Zedlers Grosses Universal-Lexikon*, Bd.5, 1732, S.776. (http://www.zedler-lexikon.de.)

（6）先駆的研究に、レオン・ポリアコフ『アーリア神話—ヨーロッパにおける人種主義と民族主義の源泉』アーリア主義研究会訳（法政大学出版局、一九八五）。一八世紀は、ベルニエ、リンネ、ビュフォン、ブルーメンバッハ、ホワイトなどによって「人種」概念の「科学的」起源の時代とされるが、これについて以下の史料集の意義は大きい。Robert Bernasconi (ed.), *Concepts of Race in the Eighteenth Century*, vol.8, Thoemmes Press 2001.「人種」概念のドイツ起源については、Sara Eigen / Mark Larrimore (ed.),

The German Invention of Race, State University of New York Press 2006. 邦語文献における社会構築主義的な「人種」研究の主なものとして、竹沢泰子編『人種概念の普遍性を問う―西洋的パラダイムを越えて』（人文書院、二〇〇五）、同編『人種の表象と社会的リアリティ』（岩波書店、二〇〇九）、藤川隆男ほか『白人とは何か？―ホワイトスタディーズ入門』（刀水書房、二〇〇五）、米国の「人種」概念についてはとくに、中條献『歴史のなかの人種―アメリカが創り出す差異と多様性』（北樹出版、二〇〇四）。

（7） 英語圏の研究については、イギリスの人類学協会によって一八六五年に出版され、現在もそのリプリント版が入手可能なブルーメンバッハの英訳本が参照されることが多い。Thomas Bendyshe (ed. and translated), *The Anthropological Treatises of Johann Friedrich Blumenbach*, published for the Anthropological Society, London 1865 (reprint 2010). 後述するように、この論文集は原典の一部や図像資料を削除したり、誤った事実を掲載しており、検証の余地がある。

（8） Londa Schiebinger, *Nature's Body: Gender in the Making of Modern Science*, Boston, 1993 (小川眞里子／財部香枝訳『女性を弄ぶ博物学』工作舎、一九九六), p.147.

（9） Sara Eigen, Self, Race, and Species: J. F. Blumenbach's Atlas Experiment, in: *German Quarterly* ; 78(2005)3, S. 277-298.

（10） 一九八〇年代に刊行された『歴史学基礎概念事典』の「人種」の項目には、ブルーメンバッハが取り上げられている。Antje Sommer / Werner Conze, „Rasse“, in: W. Conze u.a.(Hg.), *Geschichtliche Grundbegriffe*, 5. Bd., Stuttgart 1984, S.149-150. また、人類学の歴史においても「人種学 Rassenkunde の本来の父」と位置づけられるブルーメンバッハが忘れられたわけではなかった。Wilhelm E. Mühlmann, *Geschichte der Anthropologie*, Frankfurt a.M./Bonn, 1968, S.58.

（11） ドイツ人研究者による啓蒙主義と非ヨーロッパ世界に関する近年の注目すべき研究として、Jürgen Osterhammel, *Die Entzauberung Asiens. Europa und die asiatischen Reiche im 18. Jahrhundert*, München 1998, Hans-Jürgen Lüsebrink (Hg.), *Das Europa der Aufklärung und die außereuropäische koloniale Welt*, Göttingen 2006.

（12） Frank W. P. Dougherty (Hg.), *Commercium epistolicum. J.F. Blumenbachii. Aus einem Briefwechsel des klassischen Zeitalters der Naturgeschichte*, Göttingen 1984, Frank W. P. Dougherty, Christoph Meiners und Johann Friedrich Blumenbach im Streit um den Begriff der Menschenrasse, in: Gunter Mann / Frany Dumont (Hg.), *Die Natur des Menschen. Probleme der Physischen Anthropologie und Rassenkunde (1750 - 1850)*, Stuttgart / N.Y. 1990, S.89-111. ドゥゲルティは一九九四年に亡くなったが、ブルーメンバッハの著作、論文、その他の活字史料はもちろん、書簡や手稿を網羅したドゥゲルティ

の書誌学的な研究は、二〇〇九年にN・クラットにより整理され、クラットが編集する学術雑誌『ブルーメンバッハ研究』第二号に収められた。クラットにより、ブルーメンバッハに関するデジタル資料も加えられたこの研究は、二五〇ページを超す。Frank W. P. Dougherty, Bibliographie der Werke und Schriften von Johann Friedrich Blumenbach nebst ihren Übersetzungen und Digitalisierungen, in: Norbert Klatt (Hg.), *Kleine Beiträge zur Blumenbach-Forschung* 2, Göttingen 2009.

(13) Norbert Klatt (Hg.), *Kleine Beiträge zur Blumenbach-Forschung*, 1-3, Göttingen 2008- (http://webdoc.sub.gwdg.de/ebook/mon/2008/ppn%2058601369 5.pdf).

(14) Mann / Dumont (Hg.), *Die Natur des Menschen*, Céline Trautmann-Waller, Die Werkstatt Johann Friedrich Blumenbachs (1752 - 1840), in: Hans Erich Bödeker (Hg.), *Die Wissenschaft vom Menschen in Göttingen um 1800: Wissenschaftliche Praktiken, institutionelle Geographie, europäisches Netzwerk*, Göttingen 2008, S.231-251. 日本におけるブルーメンバッハのモノグラフィーに、神部武宣「『人種』概念の批判的考察――ブルーメンバッハの所説をめぐって–1–」『成蹊大学文学部紀要』通号八（一九七三）、一一 - 五二頁があるが、神部は歴史的文脈を踏まえずブルーメンバッハを酷評するもので、その分析視座には疑問がもたれる。

(15) ゲーテの顎間骨発見については、石原あえか「ヒトと猿の境界 ゲーテの〈顎間骨発見〉（一七八四）」慶應義塾大学独文学研究室『研究年報』第二〇号（二〇〇三）一 - 一七頁、「科学者ゲーテ」については、同『科学する詩人ゲーテ』（慶應義塾大学出版会、二〇一〇）が啓蒙期の知の風景を描いていて興味深い。

(16) 「人種」概念を精神的、文化的次元まで用いようとするマイナースと、身体的次元に留めるブルーメンバッハは互いに批判的で論争も絶えなかった。Dougherty, Christoph Meiners und Johann Friedrich Blumenbach. 後述するように、マイナースはブルーメンバッハよりも一〇年早く人類の区分概念として「コーカサス人種」を用いている。

(17) “Blumenbach (Johann Heinrich)”, in: *Zedlers Universal-Lexicon*, Suplemente, 3te Band, Leipzig 1752, Spalte 1432-1433.

(18) Naturgeschichte, natural history, histoire naturelle の概念は、自然誌、自然史とも訳されるが、ここでは当時、人間の分類が動植物や鉱物など自然物の分類の延長として着手された文脈を踏まえ「博物学」に統一する。

(19) Bendyshe (ed.), *The Anthropological Treatises*, p.5 (Zum Andenken an Johann Friedrich Blumenbach. Eine Gedächtniss-Rede, gehalten in der Sitzung der königlichen Societät der Wissenschaften den 8. Februar, 1840 von K. F. H. Marx, Göttingen 1840). ゲッティンゲン大学で博物学を担当した

ビュトナーは人類単一起源論をとり、一つの基本形から多様な「人種」が発達したという考えをもっていた。約三万冊に及ぶ彼の蔵書は有名で、一七八三年にザクセン・ヴァイマール公国の枢密官に招聘されたとき、貴重な価値のある一万冊をイェーナ大学図書館のためにカール・アウグスト公に売却した。"Christian Wilhelm Büttner", in: *DBE*, Bd.2, S.215, Trautmann-Waller, Die Werkstatt, S.236-237.

(20) Gundolf Krüger, "… etwas von dem Ueberfluße ausländischer Natürlicher Merkwürdigkeiten". Johann Friedrich Blumenbach, England und die frühe Göttinger Völkerkunde, in: Elmar Mittler (Hg.), "*Eine Welt allein ist nicht genug*" : *Großbritannien, Hannover und Göttingen, 1714-1837*, Göttingen 2005, S. 202-225 : Ill, John Gascoigne, Blumenbach, Banks and the Beginnings of Anthropology at Göttingen, in: Nicolaas A. Rupke (Hg.), *Göttingen and the Development of the Natural Science*, Göttingen 2002, S. 86-98 : Ill.

(21) Fritz Hartmann, "Blumenbach", in: W. Killy (Hg.), *Deutsche Biographische Enzyklopädie*, Bd.1, München 2001, S.585. なお、この記事にはキュヴィエの生没年が誤って記されている。

(22) Johann Friedrich Blumenbach, *De generis humani varietate nativa*, Göttingen 1776.

(23) Johann Friedrich Blumenbach, *Handbuch der Naturgeschichte*, 2 Teile, Göttingen 1779-1780.

(24) 現在の分類学上の概念は、門・綱・目・科・属・種であり、変種 varietatis は種の下位概念であるが、ブルーメンバッハは人類 Menschheit の下位概念としてこの語を用いているので、ここでは「コーカサス人種」としても差し障りないであろう。後述するように、第三版のドイツ語訳（一七九八年）では、varietatis の訳語に、Varietät, Race, Rasse が混在している。

(25) 初版は一〇〇頁、第三版は三二六頁である。アメリカの研究者R・バーナスコニー編集のリプリント版には、初版、第二版、第三版と、第三版のドイツ語版が収められている。Robert Bernasconi (ed.), *Concepts of Race in the Eighteenth Century*, vol.4 and 5, Thoemmes Press 2001. クラットは、ブルーメンバッハによる五分類と「コーカサス人種」という名称の登場が誤って語られることが多いと指摘している。それは一八六五年に出された英語訳のミスに基づくという。Norbert Klatt, Klytia und die »schöne Georgianerin«' - Eine Anmerkung zu Blumenbachs Rassentypologie, in: *Kleine Beiträge*, 1, S.71-72.

(26) Johann Friedrich Blumenbach, *Über die natürlichen Verschiedenheiten im Menschengeschlechte*, Leipzig 1798.

(27) ブルーメンバッハの著作の出版、翻訳などについては、網羅的にとらえた書誌学的資料集である以下の文献を参照した。Claudia Kroke, *Johann Friedrich Blumenbach. Bibliographie seiner Schriften*, Göttingen 2010.

(28) Blumenbach, *De generis humani varietate nativa*, editio tertia,Gottingae, 1795, S.286, *Über die naturlichen Verschiedenheiten*, S.204-205. 以下、『人類の多様性』については、一七九五年に出版されたラテン語版第三版と、一七九八年に出されたそのドイツ語版を参照する。

(29) Sommer / Conze, "Rasse", in: *Geschichtliche Grundbegriffe*, S.142-149.

(30) Blumenbach, *De generis humani varietate nativa*, S.289, *Über die natürlichen Verschiedenheiten*, S.205-206.

(31) Blumenbach, *De generis humani varietate nativa*, S.304, *Über die natürlichen Verschiedenheiten*, S.214.

(32) Immanuel Kant, Bestimmung des Begriffs einer Menschenrace, 1785, in: *Kants Werke. Akademie-Textausgabe*, Berlin, 8. Bd., S.99-101,(「人種の概念の規定」『カント全集』望月俊孝訳　第一四巻 岩波書店、二〇〇一、八二-八五頁), Kant, Physische Geographie, in: *Kants Werke*, Berlin, 9. Bd., S.313（『自然地理学』『カント全集』宮島光志訳　第一六巻　岩波書店、二〇〇一、二二三頁).

(33) Kant, Physische Geographie, S.312（『自然地理学』二二三頁).

(34) Blumenbach, *De generis humani varietate nativa*, S.299, *Über die natürlichen Verschiedenheiten*, S.210-211.

(35) Blumenbach, *De generis humani varietate nativa*, S.204-205, *Über die natürlichen Verschiedenheiten*, S.148.

(36) Osterhammel, *Die Entzauberung Asiens*, S.85-118, 176-208.

(37) この学術旅行は、デンマーク王フリードリヒ五世から財政的援助を得て実現した。ニーブールのアラブ旅行記は、ミヒャエリスの調査項目に答えるという形式でまとめられた。Carsten Niebuhr, *Beschreibung von Arabien*, Göttingen 1774.

(38) Edward Ive, *Reise nach Indien und Persien*, 2 Bde., Leipzig 1774-1775 (*A Voyage to India in the Year 1751*, London 1773).

(39) Johann Gottlieb Georgi, *Beschreibung aller Nationen des Russischen Reichs*, St. Petersburg 1776.

(40) 『ペルシア紀行』は、一六七一年にパリ、一六八六年にロンドン、一七一一年にアムステルダム（三巻本）で出され、死後二〇年以上たった一七三五年に「完全版」全四冊がアムステルダムから出版された。シャルダン『ペルシア紀行』佐々木康之・佐々木澄子訳（岩波書店、一九九三)。シャルダンについてはさらに、羽田正『勲爵士シャルダンの生涯』（中央公論新社、一九九九）のちに『冒険商人シャルダン』（講談社学術文庫、二〇一〇)。

(41) Blumenbach, *De generis humani varietate nativa*, S.303, *Über die natürlichen Verschiedenheiten*, S.213.

(42) Blumenbach, *De generis humani varietate nativa*, S.303, *Über die natürlichen Verschiedenheiten*, S.213, シャルダン、前掲書、二三七 - 二三八頁（羽田、前掲書、七九頁)。

(43) サイードの『オリエンタリズム』に欠けているドイツの考察とジェンダーの視点を批判するものとして、Susanne Zantop, *Colonial Fantasies*, Duke University Press, 1997, Sara Friedrichsmeyer, u.a. (ed.), *The Imperialist Imagination. German Colonialism and Its Legacy*, University of Michigan, 1999.

(44) Christoph Meiners, *Grundriß der Geschichte der Menschheit*, Göttingen 1785, S.30-33. ちなみに、旅行記の豊かな蔵書を誇っていたマイナースは、シャルダンの旅行記を「今なお、あらゆる旅行記の中で王冠を戴く地位にある」と記している。(Verzeichniß der vornehmsten Schriften, die in diesem Grundrisse angeführt werden, ohne Seitangabe)

(45) Kant, Physische Geographie, S.406（「自然地理学」三六五頁）。宮島による邦訳の「ゲオルギア」は、グルジアのことである。

(46) Kant, Physische Geographie, S.312（「自然地理学」二二二頁）.

(47) Georgi, *Beschreibung aller Nationen*, S.135-136.

(48) マイナースは、「主幹民族」とか「人種 Racen」という概念は暫定的なものとし、「コーカサス民族 Nationen / Völker」という表記も用いており、これらはすべて「人種」と同義でとらえて差し支えない。Sommer / Conze, "Rasse". マイナースにおいては、「主幹民族」の下位概念に「人種 Racen」の区分があり、「コーカサス主幹民族」を構成する二つの「人種」は「ゴート人、ケルト人」と「サルマート人、スラブ人、ヴェンド人」という。Meiners, *Grundriß*, S.6-7, 30-31.

(49) Thomas Nutz, Wissen aus Objekten. Naturgeschichte des Menschen und Menschheitsgeschichte, in: Ulrich Johannes Schneider (Hg.), *Kulturen des Wissens im 18. Jahrhundert*, Berlin / New York 2008, S. 599-606.

(50) リンネについては西村三郎『リンネとその使徒たち』（朝日新聞社、一九九七）、『文明のなかの博物学』（紀伊國屋書店、上下巻、一九九九）、リンネの植物体系の恣意性については、Londa Schiebinger, *Plants and Empire. Colonial Bioprospecting in the Atlantic World*, Harvard University Press, 2004（『植物の帝国』小川眞里子／弓削尚子訳　工作舎、二〇〇七、第五章）.

(51) Blumenbach, *De generis humani varietate nativa*, S.XXI-XXXIV, *Über die natürlichen Verschiedenheiten*, S.1-16.

(52) ブルーメンバッハは生涯にわたって頭蓋骨を収集しており、最終的には二四五個の頭蓋骨と骨の断片、それに二つのミイラを手に入れた。これらはゲッティンゲン大学の人類学コレクションに収められ、現在も保管されている。Trautmann-Walker, Die Werkstatt, S.237-238.

(53) Georg Thomas von Ash an Blumenbach in Göttingen, St Petersburg, den 29. Mai 1793, in: Dougherty (Hg.), *Commercium epistolicum*, S.148.

美の関心については、Schiebinger, *Nature's Body*, pp.126-134（『女性を弄ぶ博物学』一四五‐一五四頁）.

(62) Johann Friedrich Blumenbach, *Beyträge zur Naturgeschichte*, 1. Teil, Göttingen 1790.

(63) Blumenbach, *Beyträge*, S.VII.

(64) ベルニエもグルジアからトルコへ美しい女奴隷が輸出されていることに言及している。François Bernier, Nouvelle division de la terre par les différentes espèces ou races d'hommes qui l'habitent, in: *Journal des Savants*, 1684, pp.139-140.

(65) J・シャルダン『ペルシア紀行』佐々木康之・佐々木澄子訳（岩波書店、一九九三）、一四九頁（羽田『勲爵士シャルダン』、七八頁）。

(66) Blumenbach, *Beyträge*, S.82.

(67) Blumenbach an Daniel Nikolaus Chodowiecki in Berlin, Göttingen, den 17. Dezember 1781, in: Dougherty (Hg.), *Commercium epistolicum*, S.155−156.『博物学研究』に寄せたホドヴィエツキの挿絵は出版前にゲオルク・フォルスターの目に触れたらしい。フォルスターは一七八七年一月に解剖学者ゼンマリングに宛てた書簡の中でこの挿絵を批判している。いわく「ホドヴィエツキに描かせた絵は単なる遊びにすぎない。これでは観相学もできない」と。ただし、ブルーメンバッハがイスラームの場面を選択したことへの批判ではない。

(68) Johann Friedrich Blumenbach, *Abbildungen Naturhistorischer*

(54) Dougherty (Hg.), *Commercium epistolicum*, S.148.

(55) Londa Schiebinger, *The Mind has no Sex? Women in the Origins of Modern Science*, Harvard University Press 1989（『科学史から消された女性たち』小川眞里子／藤岡伸子／家田貴子訳工作舎、一九九二）. 拙稿「『啓蒙の世紀』以降のジェンダーと知」姫岡とし子／川越修編『ドイツ近現代ジェンダー史入門』（青木書店、二〇〇九）。

(56) Samuel Thomas Sömmerring, *Tabula Sceleti Feminini, juncta descriptione*, Traiecti ad Moenum 1797.

(57) Barbara Duden, Das schöne Eigentum. Zur Herausbildung des bürgerlichen Frauenbildes an der Wende vom 18. zum 19. Jahrhundert, in: *Kursbuch*, Bd.47, 1977, S.125-140.

(58) Edith Stolzenberg-Bader, Weibliche Schwäche – Männliche Stärke. Das Kulturbild der Frau in medizinischen und anatomischen Abhandlungen um die Wende des 18. zum 19. Jahrhundert, in: J. Martin / R. Zoepffel (Hg.), *Aufgaben, Rollen und Räume von Frau und Mann*, 2. Teilbd., Freiburg 1989, S.751-818.

(59) Ernst Brandes, *Über die Weiber*, Leipzig 1787, *Brandes, Betrachtung über das weibliche Geschlecht und dessen Ausbildung in dem geselligen Leben*, 3 Teile, Hannover 1802.

(60) Christoph Meiners, *Geschichte des weiblichen Geschlechts*, 4 Bde., Hannover 1788-1800.

(61) ブルーメンバッハの「コーカサス人種」における女性

Gegenstände, Nr.1-100, Göttingen 1796-1810.

(69) Johann Friedrich Blumenbach, *Handbuch der Naturgeschichte*, Göttingen 1796 (5. Aufl.).『博物学ハンドブック』は一七九六年の第五版以降、『博物学対象図会』の該当箇所が加筆され、一九世紀以降も広く読まれた。

(70) Blumenbach, *Abbildungen*, 1. Heft, 1796, ohne Seitangabe (S.24-3).

(71) Schiebinger, *Nature's Body*, pp.152-156（『女性を弄ぶ博物学』一七四 - 一七五頁）.

(72) 科学とエロスの対極的関係については、Evelin Fox Keller, *Reflections on Gender and Science*, Yale University Press, 1985（『ジェンダーと科学』幾島幸子／川島慶子訳　工作舎、一九九三）、近代科学が西洋的価値観に基づく「エスノサイエンス」の一つにすぎないという見方については、Sandra Harding, *Science and Social Inequality. Feminist and Postcolonial Issues*, University of Illinois Press 2006（『科学と社会的不平等』森永康子訳　北大路書房、二〇〇九）. ただし、ハーディングの訳本には誤訳が多い。

(73) Schiebinger, *The Mind Has No Sex?*, 拙稿「『啓蒙の世紀』以降のジェンダーと知」

(74) たしかに、カンペルやブルーメンバッハも女性を「人種」を産む性としてとらえ、骨盤構造の性質に関心を示している。Schiebinger, *Nature's Body*, pp.156-158（『女性を弄ぶ博物学』一七六 - 一七八頁）. S・L・ギルマン『『性』の表象』大瀧啓裕訳（青土社、一九九七）。

(75) ただし、ブルーメンバッハはジュズフの曲がった鼻が気に入らず、この肖像に不満であったようだ。一八一〇年の版においてはモハメド・ジュムラ Mohammed Jumla という男性の挿絵に差し替えているが、男性の肖像のままであったことには変わりがない。クラットによると、ブルーメンバッハは一八〇一年にコーカサスの女性たちの図像を入手したが、これらを挿絵には用いなかった。Klatt, Klytia und die „schöne Georgianerin“, S.98-100.

(76) Eigen, Self, Race, and Species, p.278, 288-289.

(77) 杉本淑彦「白色人種論とアラブ人 – フランス植民地主義のまなざし」藤川ほか『白人とは何か?.』、六〇 - 七〇頁。

(78) 『博物学研究』の五枚の図像は、表紙と序文の部分に掲載されたが、一八六五年にロンドンで出された『ブルーメンバッハ人類学論文集』では表紙から「第一の人種」の図像が抜き取られ、序文もまるごと削除されている。

(79) たとえば『大ブロックハウス事典』を取り上げると、一九三二年の版には「コーカサス人種」という項目がわずかながら説明されており、「ブルーメンバッハによってヨーロッパ人のために導入された人種の名称で、ラップ人などのモンゴル系を除く」と定義されている。イスラームや西アジアの記述はない。"Kaukasische Rasse", in: *Der Große Brockhaus*, 10.Bd., Leipzig 1932, S.35. 戦後の『大ブ

ロックハウス事典』にはこの項目は消えている。

(80) "Caucasoid", in: *The Encyclopedia Americana*, Grolier, Danbury, Conn. vol.6, 1999, p.85. たとえば、『世界史B』（尾形勇ほか編、東京書籍、二〇一〇、二三頁）では、「モンゴロイド、コーカソイド、ネグロイドなどの人類の形質のちがい」の成立が記されている。他方、『世界史B新訂版』（鶴見尚弘・遅塚忠躬編、実教出版、二〇一〇、二九頁）では、「モンゴロイド（黄色人種）・コーカソイド（白色人種）・ネグロイド（黒色人種）の三つに大別され」、近代には、「人種と民族の違いがもとになった差別意識が作り出され、他民族、他人種の支配の合理化に利用された」とある。『詳説世界史』（佐藤次高ほか編、世界史B、山川出版社　二〇一〇、二三頁）では、「白色人種・黄色人種・黒色人種」に分けようとする考えが一九世紀以来、欧米でさかんになったが、「今日では、人類を人種によって分類したり、人種間に優劣の差があると考えることには、科学的根拠がないとされている」と記述されている。

(81) Blumenbach, *De generis humani varietate nativa*, S.285, *Über die natürlichen Verschiedenheiten*, S.203-204.

（院第二五回生、早稲田大学法学部教授）